



健康会だより

<主旨と理念>

長谷部式健康会は『自分の健康は自分の努力で』をスローガンに健康普及活動をしている会です。健康は人生最高の宝です。世界人類の健康と平和に奉仕しましょう。『体質別』は健康を守る自然の法則です。

発行所 長谷部式健康会 総本部
〒491-0046 愛知県一宮市天王2丁目7-35
発行人 長谷部茂人
発行部数 3000部
tel 0586-46-1258
fax 0586-46-0367
Eメール hello@hasebe-kenko.com
URL https://hasebe-kenko.com/

ガンの正体 ～からだの正直な反応として～



より引用

がんを招く法則がある！？

人間の存在が確認できる有史以来無くならない「がん」という病。現代人が長命になったから・・・、遺伝的に・・・、それらは部分的な答えとしか言いようがありません！原因が特定できない、複数の要因が重なり合って発症リスクを高めているなど、不明、または未知が多いのがこの病の特長です。

過酷な極限環境 を作り出すと ガンが生まれる

YouTubeで配信されている「栄養チャンネル信長」さんより引用して解説を加えます。信長さんによると、がんが好む一連の環境「極限環境」を自身が作り出した結果、がんが発生するというのです。順番に見てゆきましょう。

1. がんは低酸素状態を好む

がんが低酸素状態であることは昔から知られています。酸素が少ない⇒元気が出ないと考えてもいいかもしれません。後で出てくるミトコンドリア機能障害説とも関連してくるのですが、酸素が少ない状態をわざわざ好む理由は、極限環境に対抗する為に、細胞の原始帰りが起きているからではないかとする説。太古原始の細胞は嫌氣的エネルギー産生から始まりました。嫌氣的とは酸素を嫌う環境で・・・という意味です。地球太古の極限環境下では嫌氣的にならざるを得なかったのでしょう。

これには別な意見もあります。低酸素状態はがんになっ

たために起こっているのであって、原因と結果が逆だとする解釈す。しかし、いづれにしても「がんが低酸素状態を好む」に間違いはないようです。

2. がんは低体温を好む

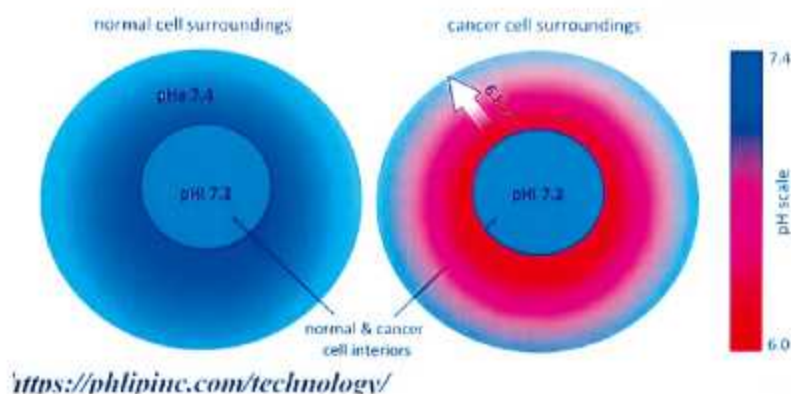
進行がん患者が延べて低体温であることは事実です。冬の寒さが苦手、夏でもクーラーで冷えるなど、がんが進むにつれて寒さに敏感になり、夜も眠れなくなるなど生活上に支障が出るのがしばしば。がん細胞が低体温をつくっているのか、他の理由で体温が作れない状態が先にあり、がんが棲みつきやすい環境になったのかははっきりしません。どちらも体熱を運ぶ血液循環が悪いことに違いありません。



3. がんは酸性環境を好む

私たちのからだは中性からややアルカリ性に保たれています。ところががんの人の多くが酸性体質になっています。もう少し正確に言うと、がん細胞自体のph(ペーハー)は正常細胞と同じなのですが、がん細胞の周囲はphが6.8～6.0と酸性を示しています。これには理由があり、先に述べた嫌氣的な環境、つまり乳酸をばらまくことでphが下がるわけです。

正常細胞 ガン細胞

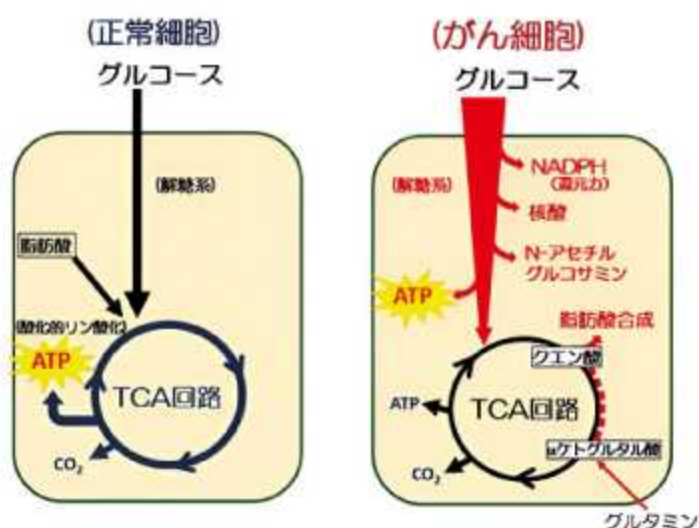


<https://phlipinc.com/technology/>

がん細胞が作り出す乳酸で細胞周囲は pH が下がって酸性に傾く

4. がんが招く低栄養状態

がん細胞は正常細胞とは異なりグルコース(糖)の取り込み量が多く、細胞のエネルギー通貨であるATPの産生源を主に解糖系に依存している。(Wikipediaより引用)



食事から摂取した糖分(グルコース)を、がん細胞はやたら欲しがり、他の細胞まで行き届かないので痩せてくる。つまり栄養が足りない低栄養状態になる。仏教の教えに出てくる「餓鬼」のようです。



※「餓鬼」 仏教の六道の一つである餓鬼道に堕ちた亡者のこと。常に飢えと渇きに苦しみ、飲食しようとしても食物が火に変わってしまうなど、決して満たされることのない存在。

5. 有害金属の蓄積

有害金属とは、水銀(水俣病の原因)、ヒ素(毒薬)、鉛(貧血、子供の発達障害の原因)、カドミウム(イタイイタイ病の原因)、アルミニウムなど、体内に蓄積されると健康に害を及ぼす物質の総称です。これらは魚介類、食品、化粧品、大気、水道水などから摂取され、不妊、脱毛、アレルギー、疲労、神経症状などの健康トラブルの原因となり、体内に蓄積することで慢性的な健康障害を引き起こす可能性があります。(GoogleAIより引用)

これら有害金属はごく微量で健康被害に及びます。「水銀を食べています」などと言われる方はいませんが、大型の回遊魚、例えばマグロの「刺身が好きで毎週食べています」と答える人は必ずいます。生体濃縮という小魚を中型の魚がエサに、中型の魚を大型の魚が食べることで有害な微量元素が食物連鎖によって濃縮するしくみがあります。そういう意味では人間の肉が最も危ない！ということになります。



生きものは、食べる・食べられる「食物連鎖」という関係にあります。

体重が 500 キロもある牛の肉が平然と食卓に並ぶ。



6. 過剰鉄



正常な赤血球



鎌状の赤血球

前号(第67号)でマラリアと鎌状赤血球症のことを書きました。マラリア原虫が好む「鉄」を渡さないように赤血球を鎌状に変形させてマラリア症を引き起こしにくくしている

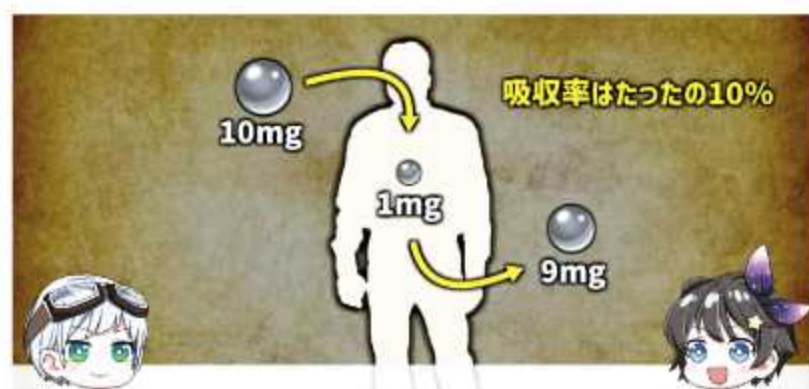
半面、人体は貧血に悩まされる結果となる。体内の鉄分とマラリア症をトレードした結果、「貧血やむなし」になったのです。

そもそも地球は「鉄の惑星」といわれるぐらい鉄は豊富にあります。・・・地球総重量の約35%が鉄。豊富にあるのに鉄欠乏貧血に悩む人が多いなんて矛盾しているように見えます。事例をあげて説明してみます。



肺結核患者に鉄剤を投与するとかえって症状が悪化することが昔から知られていました。アフリカのマサイ族は鉄分摂取が少ないために鉄剤をすすめた結果、88%の人が赤痢に感染してしまいました。

同様にソマリ族の感染者は8%から38%へ増加。マオリ族にいたっては鉄剤投与の前後で7倍も感染症が増加するという事態になりました。



私たちは一日当たり約10mgの鉄分を摂取しています。しかし吸収率はわずか10%、ほぼ1mgしか吸収せずに残り9mgは捨てています。

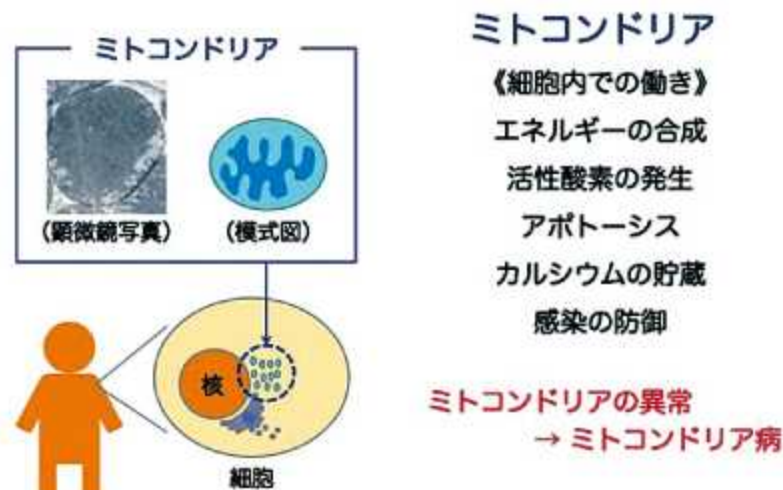


腸内でペプシジンというホルモンが働き、わざと鉄分の吸収を抑え、鉄分不足ギリギリの状態にしています。

病原菌も生きものです。鉄分が多いほうが自分たちの繁殖に都合がいい。だから人体は鉄分を過剰に持たないようにすることで病原菌への防御をしているのです。

前項の有害金属同様、食の偏りによる鉄分の過剰摂取、または治療のために鉄剤を過剰に投与すると、体内で活性酸素が増えて細胞に傷がつく。いきおいがんに・・・ということが考えられます。

7. ミトコンドリア機能障害



細胞内のエネルギー(ATP)産生に関わるミトコンドリアの機能が低下する病態。遺伝子変異や酸化ストレスなどが原因で起こります。酸化ストレス、カルシウム恒常性の乱れなどの細胞内の機能不全も、ミトコンドリア機能障害を引き起こすことがあります。

この機能低下は、エネルギーを多く必要とする脳、心臓、筋肉などの臓器に影響を与え、神経症状、心臓病、筋力低下、疲労感などの症状を引き起こします。ミトコンドリア病の原因としては、すでにミトコンドリアDNA上に200個以上の病的変異が同定されています。(GoogleAIより引用)

エネルギーを生み出す源泉であるミトコンドリアが異常をきたすことであらゆる生命維持活動、病気に対する免疫力が下がってしまいます。

8. バクテリア感染説

がんの原因はバクテリア(細菌)の感染によるものではないか?とする説があります。ちょっと妙な感じを受けるかもしれませんが、肝臓がんや子宮頸がんなどの一部は細菌もしくはウイルスの感染が原因であることがすでに確認されています。乳がんもその疑いがあります。

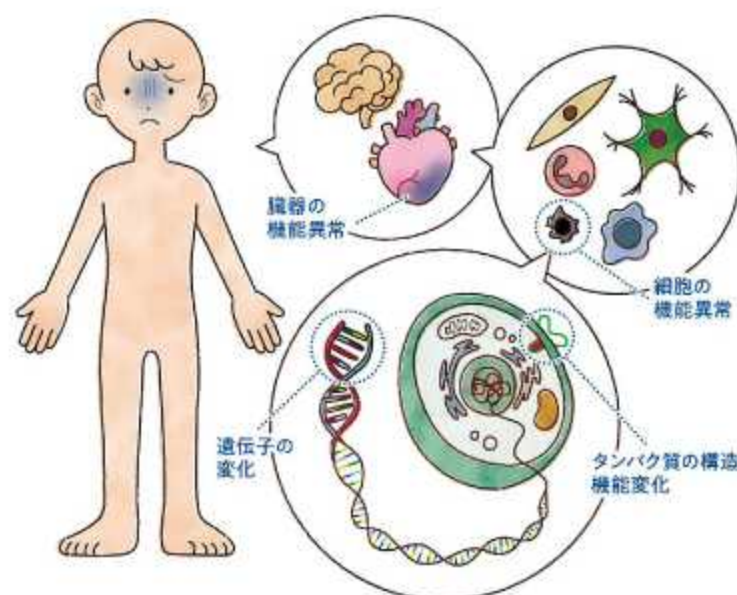


レンサ球菌には致死率が約3割にも及ぶ劇症型、別名で人食いバクテリアと呼ばれるものがあります。

**劇症型溶血性
レンサ球菌感染症**

9. 遺伝子の異常・変異説

終局的にはがん病態とは遺伝子レベルでの異常または変異にほかなりません。しかしそれが結果なのか原因なのかは意見が分かれます。以下の図は遺伝子レベル、細胞レベル、臓器レベルでの体細胞異常を指示したものです。体細胞異常が起きても一代限りご本人だけということになっていますが、がんが起きやすい遺伝子を持つ家系も明らかになっています。がんは遺伝なのか、そうでないのか? 遺伝子に尋ねるしかありません。



ここに挙げたそれぞれの項目が今号のテーマ「がんの正体」に対する決定的な答えにはならなくとも、病気が起こるきっかけ、進行する過程として「極限環境」を自身の身体にさらしていたことは間違いなさそうです。

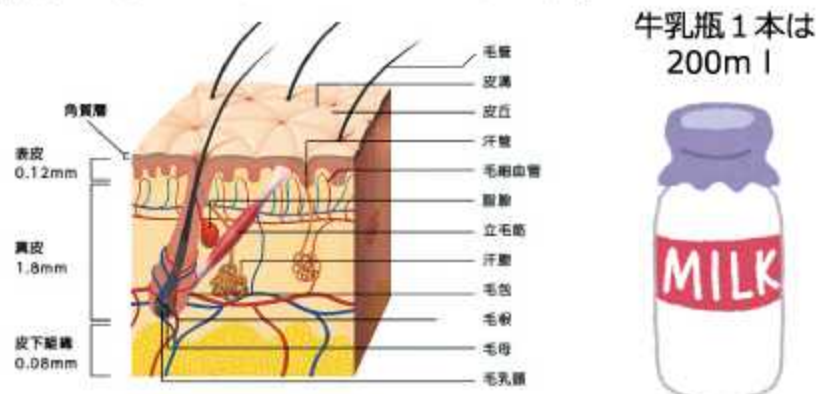
がんに対する長谷部式健康法とは？

ここまで、がん発症の要因が1つではないことが分かります。また、特効する薬や副作用のない治療法が確立できない理由もご理解できたのではないのでしょうか。

長谷部式健康法におけるこれら課題に対しての考えを述べます。

1. がんは低酸素状態を好む

→長谷部式では体質別の全身温熱法で発汗を促し、皮膚呼吸を整えます。皮膚呼吸は肺での呼吸に対して0.03%のガス交換しかしません。しかし、一日約200mlの酸素が取り込まれているといわれます。



2. がんは低体温を好む

→長谷部式では全身温熱法により、全身の血液循環がよくなります。体質に合わせたエキス剤の選定と加温領域や実施時間を調節することにより、からだの負荷が下がります。元気な体温をつくる施術法です。



3. がんは酸性環境を好む

→長谷部式で皮膚呼吸を改善することにより、がんが増えた活性酸素を減らします。中性～アルカリ性の体内環境を目指します。

4. がんが招く低栄養状態

→長谷部式健康法は全身温熱法だけでなく、体質別の食事療法を提案しています。具体的には食物の陰陽の性質を勘案した自然食で、なおかつ病体質でも消化吸収できる方法がのぞまれます。



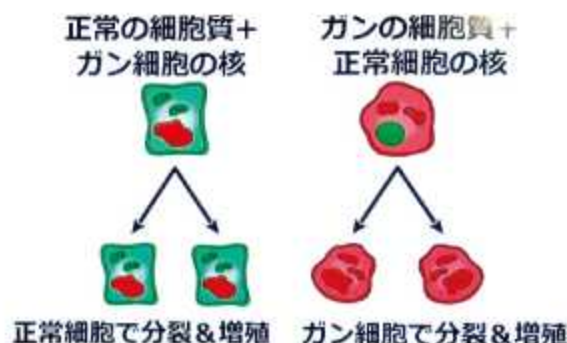
5. 有害金属の蓄積 / 6. 過剰鉄

→長谷部式健康法考え方の基本は「排毒」です。全身温熱法での皮膚排泄と食事療法で排便、排尿を促進する。また、酸性体質をつくらないようにすることも大切です。ギリギリ鉄欠乏でない程度の鉄分摂取を保持します。



7. ミトコンドリア機能障害

→がん細胞の中の核を正常細胞に移植すると、正常細胞ががん化しそうですが、そうはならないという実験があります。その逆で、がん細胞の核を正常細胞に移植してもがん細胞はがんのまま変化しなかった。



細胞中のミトコンドリアは核とは別の遺伝子を持っており、がん細胞中のミトコンドリアを正常細胞に移植するとがんになったそうです！がん遺伝子が特定される昨今、もしかするとミトコンドリアの遺伝子異変がカギなのかもしれません。

8. バクテリア感染説

→肝臓がん、胃がん、大腸がん、子宮がんなどの一部が病原性の細菌、またはウイルスによるものであることが明らかになっています。悪性新生物(がん)は表皮細胞、つまり外界からの物的侵入経路にあって、細胞の入れ替わり(つくり変わり)速度が早いところにしやすい傾向があります。細菌やウイルスの遺伝子変容の速度が早いことから、因縁を疑いたくなります。

9. 遺伝子の異常・変異説

→がんが細胞質の異変であることは疑いようがありません。遺伝子は、「頑なに変化を拒む」性質と「環境変化のストレスに対応する為に積極的に変化させる」性質が同居しているようです。

今回、細胞レベルで変化するきっかけとしての「過酷な極限環境」を指摘しておきました。からだは正直です。主人のいわれるまま「前向きに」変化しようとして、それが上手いかないでがんになっていると考えるべきです。